

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	世田谷区粕谷 2-22-3
園名	八幡山保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

やりたいこといっぱい！自然物から広がる園庭遊び

<テーマの設定理由>

園庭の一部に畑があり、雑草が生い茂る環境になっており、普段の園庭遊びの中でダンゴムシや昆虫等の虫探しを楽しむ姿が多く見られている。また、野菜くずや雑草を使ってままごとやごっこ遊びを楽しむことで、自然物がより身近なものになっていると感じる。自然物や生き物との関わりが深まることで、より興味や関心が広がり、子どもたちなりの気づきや探求心に繋がっていくと考えるため。

2. 活動スケジュール

- 1回（4月）どんな園庭で遊びたい？虫・花・魚がいっぱいの園庭を考えよう
（どんな園庭だと虫が来てくれるか、ままごとに使えるような花はどんなものかを子どもたちと一緒に考える）
 - 2回（5～11月）園庭にきた虫を観察して調べてみよう
（園庭にいた虫を捕まえ、図鑑等を使いながら生態を調べて飼育してみる）
 - 3回（1月）自然の変化を楽しもう
（氷が張る等季節による園庭環境の変化を遊びに取り入れてみる）
- ・活動内容については園内会議等で情報を共有、クラスだより・園だよりを通して保護者へ情報発信をした。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

園庭に虫が好む草や木を植えたりビオトープを設置したりすることで、様々な虫が園内に来るといった環境を整えた。飼育ケースや虫取り網を園庭に用意し、自由に虫を捕れるような環境を設定した。また、大きさの異なる飼育ケースや虫眼鏡がついているケースを用意することで、じっくりと虫を観察できるようにしたり虫の飼育を楽しんだりできるようにした。図鑑も種類と数を増やし、虫を捕まえた際にその虫がどのような名前か、どんな生態なのかをすぐに調べられるような環境を整えた。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ② 園庭での虫探し ～土の中？木の上？保育園のいろんな場所を探してみよう～
- ② 昆虫の飼育と生き物への思いやり ～「ちょうちょうを飼いたい！」の一言から～
- ③ メダカを観察しよう ～ビオトープをのぞいてみると～

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

①園庭の環境を変える前は、ダンゴムシやアリ等の土の中や地面にいる昆虫探しを中心であったが、虫取り網が園庭に設置されると、土の中だけでなく飛んでいる虫（ちょうちょう・トンボ等）にも興味を持つようになった。「木の上ならいるかもしれない！」「向こうに飛んで行ったからあっちから捕まえよう！」と子どもたちなりに予測をしたり考えたりしながら虫探しを楽しむ姿があった。



②捕まえた蝶々を観察していると、「お部屋でちょうちょうを飼いたい！」との声があがった。「ちょうちょうってどんな餌を食べるの？どんなお家だと暮らしやすいかな？」と保育士が問いかけると、図鑑で餌や住む場所を調べて紙に書き取り、必要なものをそろえていく。しかし、飼育が難しく次第に弱々しい姿になっていく。そんな姿から「外にいる方がいいのかも。逃がしてあげよう」と子どもたち同士で話し合う姿があった。身近な生き物への興味や関心を深め、生き物への思いやりの気持ちが育まれていく様子が見られた。また、図鑑の種類を増やしたことで、捕まえた虫を確認し、図鑑で虫の名前・特性・飼い方等を調べて絵や文字で表現してみるなどの遊びに繋がっていった。



③「メダカの赤ちゃんが保育園に来てくれたけど、まだ小さくてビオトープには住めないみたい。どうしようか？」との問いかけに、「大きくなるまでみんなでお世話しようよ！」と声が挙がり、メダカの稚魚を保育室内で飼育する。「見て！目があるよ！」「みんなで集まって泳いでる～お出かけかな？」と観察を楽しみながら飼育を続け、ビオトープに放流する。放流後、「メダカ元気かな？」「こっちにメダカいたよ！」と観察を楽しむ姿が見られた。冬になり気温が下がると、いつものようにメダカを見に行ったら児がビオトープの水面に氷が張っていることに気づく。「大変だ！メダカが死んじゃうから助けなきゃ！」と友達に知らせ、氷をスコップで叩き、氷を取り除いていく。「メダカ生きていたよ！」とメダカの様子を確認する姿があり、生き物に対する思いやりの気持ちが見られた。



5. 振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

- ① 虫取り網を用意したり、図鑑をすぐに見える場所に置いたりすることで、興味をもったことを深掘りしていこうという意欲に繋がっていった。道具や環境を整えることで、自然物に関する興味や関心が同じであっても子どもたちの視点が変わり、遊びの幅が広がっていったように感じる。引き続き子どもたちの興味や関心を大切にしながら探求心を満たし、遊びを充実させられるような環境を整えていきたい。
- ② 子どもたちの“今これが知りたい！これがあったらいいな”がすぐに叶えられる環境を整えることで、遊びへの興味や関心が途切れずに、子どもたち自らがより深めていこうとする姿が見られた。また、飼育を通して生き物と生活をする中で親しみを持ち、生き物の立場に立ち、思いやりをもって関わろうとする気持ちが育まれていった。活動を通して、子どもたちの“今”に寄り添い、子どもたちの願いを受け止められるような環境の重要性を再確認することができた。
- ③ ビオトープを設置し、水辺の生き物の観察も楽しめるようにしたが、副次的に“氷”という素材が生まれた。氷の下にいるメダカを助けたいという思いやりの気持ちが育まれている様子であった。また、氷を使ったままごと遊び等、素材からイメージを広げて自ら遊びを広げていた。子どもたちの姿に応じて環境を整えていく中で、新たに生まれる環境要因や偶然の出会いを大切にしていって保育を行ってきたい。